

類聚国史に書かれた 818 年の地震と 赤城山南斜面に残された 9 世紀の地変

早川由紀夫・森田 悌・中嶋田絵美（群馬大教育）・加部 二生（新里村教委）

類聚国史 足尾山地に北東側の片足を載せて成長した火山である赤城山（1828m）は、南西側、とくに南側の関東平野に向かって長い裾野を展開している。その斜面上で、9 世紀に激烈な地震が発生した。その被害の様子が、『類聚国史』の弘仁九年七月と八月（818 年 8 月～10 月）の条にみえる。

「九年七月。相模。武蔵。下総。常陸。上野。下野等国地震。山崩谷埋数里。压死百姓不可勝計。... 八月庚午。遣使諸国。巡省地震。其損害甚者加賑恤。... 上野国等境。地震為災。水潦相仍。... 免今年租調。并不論民夷。以正税賑恤。助修屋宇。使免飢露。压没之徒速為斂葬。」

「山崩谷埋数里」の部分の「谷」を「或」と書いた異本もある。「或」と読むことによって人里が埋まった途方もない大きな地震が発生したと解釈することも可能だが、「山崩谷埋」の対語であると読むほうがもっともらしい。この時代の 1 里は約 500m だから、谷が 2-3km の長さに渡って崩壊土砂によって埋まったと解釈する。

七月の条は、関東諸国を慣例順に則って列挙しているが、調査報告を書いた八月の条で上野国（いまの群馬県）だけを取り上げていることから、その震央は群馬県内にあったものとみられる。

赤城山南斜面の地変 この地震によって生じたと思われる地割れ・噴砂・土石なだれ・洪水の痕跡が、赤城山南斜面の市町村で毎年百余り発掘される遺跡からしばしば掘り出される。それら地変が 818 年地震によるものであるとの解釈は、群馬県新里村教育委員会が 1991 年に発行した資料集「赤城山麓の歴史地震 - 弘仁九年に発生した地震とその災害 -」（86 ページ）や、能登ほか（1990 信濃 42-10）などがすでに指摘している。

地割れ 新里村教育委員会が 1991 年から 2000 年までの 10 年間で発掘調査した 196 遺跡のうち 12

遺跡で、平安時代前期の顕著な地割れが見つかった。ロームが割れて、その中をクロボクが充填している例が多い。開口幅は最大 5m、多くは数 cm～数十 cm である。幅広の地割れは内部が陥没している。しばしば蛇行しているが、それは降雨時に発生した表面水の流れ込みによって縁が半月形に浸食されたものようにみえる。等高線に平行に伸びている例が多いことから、重力性の側方移動によって生じた地割れだと思われる。

土石なだれと洪水 急斜面の崩壊によって生じた土砂が、新里村内の広い範囲を高速で流下したらしい。断面で見るとクロボク・ローム・降下軽石堆積物・溶岩塊などをパッチワーク状に配置する厚さ数 m の地層が、谷筋の低所だけでなく、現在尾根になっている高所にも分布する。その下流延長部には、レンズ状に成層した厚さ数十 cm の地層が谷筋を埋めるように分布する。水の流れによってつくられた地層であろう。

年代 これら地変の年代情報には、次がある。1) 榛名伊香保軽石（6 世紀）と浅間 B スコリア（1108 年）の間に挟まれる（能登ほか、1990）、2) 出土する土器の形式から「8 世紀初頭から 9 世紀後半」の間に絞り込まれる（能登ほか、1990）、3) 土石なだれ中に横倒しになっていた大木の放射性炭素年代は 1390 ± 40 年 BP（Beta-163354、¹³C 補正後）である。樹木年輪をもとにして暦年代に直すと西暦 650 年前後になる。

過去の類似例 赤城山斜面における過去の類似地変には、次がある。

1 万 4300 年前	中原土石なだれ	西斜面
3 万 0100 年前	西窪岩なだれ	南斜面
13 万 2000 年前	石山岩なだれ	南斜面
13 万 2000 年前	橘山岩なだれ	西斜面